

COVID19と私たち

出席者

室 淳子 現代英語学科教授

石田 聖子 世界教養学科准教授

松山 洋平 世界教養学科准教授

今泉 景子 国際教養学科准教授

司会

亀山 郁夫 学長／教授

亀山 これから『Artes MUNDI』のコロナ特集の座談会を開催いたします。この特集は二つのパートからなっております。一つは私たちの世代と言いましたら変なんです。主として六十代、七十代の世代の人たち、もう一つは比較的若いより若い世代ということで、私はちょっと例外ですが、司会役ということいろいろと発言をしたいと思っております。

今、コロナ禍が非常に厳しい状況の中にまた再び入りつつあります。第一波、第二波、第三波と経る中で、われわれの考えることも微妙に変化してきています。私自身このコロナの問題が浮上した当初は、半ばノイローゼ状態に入っておりました。それは感染する恐怖よりもむしろ感染させる恐怖です。また、感染することによって受ける差別とレッテル

の恐怖といってもよい。『朝日新聞』にその時の恐怖について書いたことがあります（『新人生へ 無自覚から立ち上がり』四月八日、朝刊）。その時、私がイメージしていたのは、「バタフライ・エフェクト」です。人間の呼気が次の人への感染を生み、それが最終的には、感染爆発を起こし、何千万という規模に膨れ上がる。ブラジルの一匹の蝶の震えがニューヨークでハリケーンを起こす、という不確定理論のイメージですね。私は、そういう妄想に駆られ、ノイローゼに陥りました。それと同時に人間が呼吸をするという生命活動の根本そのものが他人に危害を与えるという、一種の原罪の神話に通じることから、このコロナ禍をドストエフスキーのテーマに絡めて考えました。総じて、コロナ禍の発生当初は、人々の問題意識がヒステリックなまでに研ぎ澄まされ、洞察力に溢れた言説が数多く生まれましたが、この



今泉 景子



松山 洋平



石田 聖子



室 淳子

コロナ禍がいわば常態化し、「ニューノーマル」と呼ばれて一般化されるにつれ、つまり、いわゆる慣れが生じるにつれ、現象面の哲学的な分析よりも、政策論争へと転化していった観があります。そうした流れに抗して、もう少し反省的視点から、一人ひとりが何を考えたか、そしてまた自分自身の個人的な関心や自分が研究するフィールドとどう繋がったかといった問題について改めて議論するのも面白いのではないかと考えた次第です。

今日は、ズームによる座談会に、北アメリカ地域文化の研究者である室淳子先生、そしてイタリアを中心とする文学、映画史の研究者である石田聖子先生、そして、イスラム思想史研究の松山洋平先生、そして、現在、航空業界を主としてホスピタリティの問題を研究されている今泉景子先生の、私も含め五人の先生方にお集まりいただきました。では、トッパッターとして室先生の方からお話をさせていただきたいと思えます。

室 では、私のフィールドである北アメリカからお話を始めます。ご存じのように、アメリカはとても大きな国で、メディアも本場にいろいろなことを論じていて、今も感染が非常に広がっているというところで強い危惧を抱いています。アメリカ大統領選のお話をしますと、コロナ対策では、トランプの姿勢とバイデン氏の姿勢では、ずいぶん違うというのは大きく注目されていますね。アメリカの状況を語るには、正当な議論もありますけれども、ある種偏見だとか、「あの人たちは」みたいな言い方も耳にすることがあって、常々、慎重でなければならぬと私自身も思っています。

私が専門にしている先住民の話題というのは、なかなかメディアにも、あるいはデータ面でも上がってこないものですが、アメリカが調査をする際には、白人、黒人、ヒスパニック、その他の「その他」の中に先住民が含まれる。そうすると、実際に例えば感染の状況がどのくらいであるのか、どのような問題を抱えているのかというものが、非常に見えにくくなるわけですね。もちろんアメリカの人口の1%、2%を占めるに過ぎないわけですから、その意味で当然です。というわけで、少なくとも先住民における現状というのは、よく見えてこない。

アメリカを考える際、食の格差という話も重要です。ファストフードなど安く得られる食事、経済、貧困の問題、これらは、先住民の人たちにとっても重要です。そのため、こうしてコロナ禍のような状況が起きた場合、感染が深刻化しやすいような状況にあることは確かですね。あるいは、居留地などのコミュニティにおいては、医療の問題ですね。しかもその実態はなかなか把握できていない、といった話もあります。もともとアメリカ社会が抱えていた社会格差の問題が、このコロナの中で一挙に浮上してきたという印象をもちます。

亀山 ありがとうございます。では、石田先生、お願いできますか。

石田 まずはコロナ禍を受けての個人的な雑感をお話しさせていただきます。今回、ヨーロッパで最初に新型コロナウイルスの感染爆発が起こったのはイタリアだったんですね。ロンバルディア地方という北の方の地方でのことでした。私はちょうど出張で、二月末に、その震源地に近いミラノという町に滞在していたんです。それまでイタリアではイタリア人の感染者というのがまだ一人も出ていなかったもので、新型コロナウイルスは対岸の火事のような受け止められ方をしていたんですけれども、二月末に最初のイタリア人感染者が発覚したことをきっかけに、社会の様子が変わり変わると変わるさまを目の当たりにしました。その前の日まで、誰も新型コロナウイルスの話なんてしていなかったのに、一晩明けたら、町じゅうが新型コロナウイルスの話題でもちきりになり、マスクや消毒液がすべて売り切れ、それまで一人も見なかったようなマスク姿のイタリアの人々が町にバツと溢れ出たんですね。たった一晩ですべてが変わってしまったというので、大変な衝撃を受けると同時に、

日常や常識とはこんなにも脆いのだと痛感させられました。日本での変化はもっと緩やかだったので、イタリアでのこの急激な変化には強い印象を受けました。

亀山 ありがとうございます。本当に衝撃的な光景だったと思いますね。イタリア人にとってそれだけ大きな衝撃だったということは、逆にいうと、それだけ異質なものとして受け止められたってということなのでしょう。

石田 はい、そうだと思います。その意味で、特にコロナ禍初期に、イタリアやヨーロッパで、ウイルスとの「戦い」や「戦争」といった表現が多用されたことは象徴的です。

亀山 では、松山先生、いかがでしょうか。

松山 このコロナ禍では、日本社会の問題に関心を持ちました。とくに、私たちの社会全体が、こういった例外状態に対していかに脆弱かということについて、時折考えていました。この例外状態というのは、別の言葉で言い表すと、「偶然性の問題」と言い換えてみることもできると思います。偶然性とは何かというと、人間の意図や予測といったものが伴わずに生じる現象のことを、一般にいいいます。私たちはこの偶然性に対して、非常に耐性がないというか、弱い部分があります。だから混乱してしまうわけです。

特に現代の日本社会では、身の回りのさまざまなものが制御できていると信じられてる傾向が強いと思うんですね。こういった傾向というのは、日本の若い世代の中に非常に強く見られるように感じています。その根本にあるのは、特定の入力値に対して、特定の出力がそのまま出されるといった考え方です。学生の場合、自分の能力の向上、あるいは将

来の設計を、そういう考えのもとに行っている気がします。しかし、実際の現実ではむしろ多くの出来事は、入力通りの出力がなされるのではなくて、非常に多くの偶然性が含まれます。これは、先ほどの亀山先生のバターライ効果における偶然性の話にも通じます。そういった偶然性を受け止める力が、ある面で試されているような気がします。

亀山 とても示唆的な論点だと思います。今回、世界の大学生が経験している状況を、私自身が大学一年生の時に経験しているんですね。その時の状況を、今、松山先生が提示された「入力」と「出力」という観点でいうと、少なくとも私に関するかぎりは、世界は偶然性に支配されているという漠とした予感のなかで生きてきた。現実には多くの同級生が、まったく方向違いの出口へと追いやられていった。運命的というのでしょうか。その意味では、不意打ちにたいする耐性というのはできていたような気がします。では、今泉先生、お願いします。

今泉 まず個人的な雑感ですが、私はエアライン業界で働いていましたので、業界とそこで働いている仲間のこと、大学や学生のこと、あと自分自身と家族のことという三つのことで、いろいろと思うことがありました。

まずは業界やそこで働いている仲間のことについて、その立場から感じたことは、正直、「あ、また来たな」という感じでした。「また来たな」というのは、エアライン業界は、このような予期しない出来事に非常に影響を受けやすいんですね。これを私たちはイベントリスクといっています。私がグランドスタッフの頃は、二のテロが起こり、それからSARS、リーマンショックなど色々なイベントリスクに影響を受け、浮き沈みがありました。業界が上向きになって一定期間経つと再びイベントリスクに影響を受け、また回復していくことを繰り返してきました。今回のことに関していえば、その前の年まではインバウンドもどん

どん増え、これから東京オリンピックに向かつてさらに加速していくという時に、今回のコロナ禍が来りましたので、「ああ、またイベントリスクだ」というのが、正直な受け止め方でした。ですから、これまでの経験から今後業界が非常に厳しくなるだろうと感じました。

あとそれに関連して学生のことですね。エアライン業界で働きたいと思っている学生、そして大学として留学、またエアライン業界への就職を強みとして出しておりますので、これからのようになっていくのだろう、どうしていかなければならないかという思いが二つ目にあがりました。

最後は、自分自身と家族のことです。仕事をこのまま続けることができるのだろうかなど、本当に個人的なことを考えてしまっている自分がありました。以前、私は給与やボーナスカットも経験していますので、そのようなことを考えてしまう自分が正直いました。

亀山 ある意味で、松山先生の言われた「耐性」はできているということでしょうか。今日でいう「レジリエンス」ですね。

今泉 そうかもしれません。思いかえせば、常に空港である種のリスクと隣り合わせでした。台風だろうがなんだろうが、空港には絶対行かなくてはならない、私たちは休めないという覚悟を持ってやってきましたから、新型コロナウイルスそれ自体に対する恐怖心というのは正直なかつたですね。色々と申し上げましたが、今の状況というのは、これまで当たり前前に対したものに對する感謝を覚えてくれる時なのだと言個人的に受け止めています。

亀山 ありがとうございます。では、第二巡目に入ります。

私からちょっと一言紹介すると、コロナ禍が起こり、なおかつ中国が速やかにそれを処理していったという状況があります。全体主義シス

テムが持っている国、いわば強力な統制システムを持っている国が、コロナ禍を抑えこめたという皮肉な状況があります。私は専門がロシアでするので、どうしても旧ソ連との比較が頭の中をよぎります。自由主義体制になって、逆にパンデミックを抑え込む力を喪失したといった状況ですね。逆にまた、これは、体制だけの問題なのか、あるいは国民性の問題にも通じているのか、という問題も浮上してきました。かなり早い段階では、私は、かりにロシアにもしこのコロナが入っていったら、ひどいことになるだろうという予測を立てました。それはソ連崩壊期にH1Vが国内で発見されて、その後爆発的な感染を経験している状況とのアナロジーです。ロシアの将来に非常によい不安を抱きましたね。

さて、私の専門性ということ絡めていうと、この八月に、『日経新聞』に「半歩遅れの読書術」というコーナーで四冊ほど本を紹介したことがあります。それぞれ領域もテーマも違うなから、今回のコロナ禍に通じるテーマを拾い出そうとしたわけです。その中で、レイ・ブラッドベリというアメリカのSF作家が、一九五〇年代の頭に「サウンド・オブ・サンダー」という短編小説を書いているんですね。これは、その当時、「レイ・ブラッドベリ劇場」というシリーズもののテレビ映画にもなっているようです。じつはこれが、「バタフライ効果」をテーマとした作品なんです。しかも物語の背景に、一九五二年のアメリカ大統領選がある。リベラル派の大統領と、独裁派の大統領の一騎打ちで、リベラル派が勝つんですが、タイムトラベルを行った冒険家の小さな逸脱が、未来に巨大な変化をもたらし、大統領選の結果が覆るといって、ぞっとするような話です。

そのほか、自分の専門性の中でコロナ禍を考えた場合に、浮上してきたのが、ドストエフスキーです。彼の『罪と罰』に、一八六〇年代にドイツでその存在が知られた寄生虫の話が出てくるのですが、これが、現代のコロナ禍に重なってくる。最近では、アルベール・カミュの『ペスト』とか、十七世紀の英国を舞台にしたダニエル・デフォーの同じ『ペ

スト』との作品とか、話題になっていますが、文学のみならず、表象文化全体からこれに類似した作品を取り上げて個々に論じていくと、全体の災厄にさらされた人間の脆さという問題が生々しく描かれていることに気づきます。まさに、耐性の問題ですね。では、さっそく室先生にお話しただけだと思います。

室 偶然といえば偶然なのですが、じつは、一期の授業で、アメリカのやはり先住民の子どもの物語を取り上げました。これは、去年からのつづきで、何といつても児童書ですし、英語もやさしいものですから、わりと学生たちが取り組みやすいということを取り上げました。「クリティカル・リーディング」という授業の一環でもあるんですが、そこで取り上げられているテーマは、これまで知られている歴史を先住民側からみたらどんなふうに読めるかという、そういう部分を「クリティカル」の言葉とかけて取り上げたわけです。じつは、その物語に、天然痘の蔓延というトピックが出てくるんですね。このテキストを選んだ段階で、コロナの流行などまったく予想もしていませんでしたから、改めて強い驚きを覚えました。天然痘の流行も、もちろんパンデミックの一つとして捉えることができます。抵抗力のまったくないアメリカの先住民の多くがヨーロッパからもたらされた天然痘に罹患して、犠牲となる。一つの大きな、人口を減らす大きな理由となる。むろん、状況はずいぶん違います。まさに春先から夏にかけては、だれもがピリピリしていた時期ですから、現代の読み手である私たちにとっても、知らない遠いところの物語として読むのとは、また違う緊張感をもって読むことができましたね。

石田 一般にイタリアには芸術の国というイメージがありますが、そのイタリアの人々の芸術に対する信頼の厚さというのを改めて確認することができました。イタリアは、ヨーロッパで最初にロックダウンを導入

し、三月はじめから二カ月間、不要不急の外出を一切禁止するという非常に厳しい措置をとったわけですが、そのロックダウン中に人々が芸術の力で試練を乗り越えていったということがありました。

日本でも新聞などで紹介されていましたが、家から出ることでできない市民が、バルコニーに出て、みんなと一緒に合唱をしたり、楽器演奏をしたり、オペラ歌手がアリアを歌ったりといったことが日々行われていました。芸術の力を介して連帯を確認し、前向きに苦境を乗り越えようとしていたというわけです。昨今、グローバル化が進むにつれ、いわゆる地域らしさというのが、少し見えにくくなっていったように思うんですが、今回のコロナ禍でお国柄というのでしょうか、地域ごとの特性のようなものが出てきたように思います。それが芸術の力を借りるという方向で出てきたところにイタリアらしさを感じました。

亀山 たしかに、このパンデミック下、個々の国民性を浮き彫りにするという側面はあったような気がします。松山先生、いかがですか。

松山 中東諸国の状況を見ると、感染予防対策としては、西欧諸国とさほど変わらず、同様の対策が講じられました。ロックダウンもされましたし、マスク着用も呼びかけられましたし、ソーシャルディスタンスもやはり呼びかけられましたから。そういう意味で、とくに中東諸国特有の目だった現象というのは、政府の感染予防対策としてはなかったように理解しています。ただ、中東の人たちは、日本のようにあまり神経質ではない部分もありますので、実際に現地にいる人の話ですと、じつはみんなあまり気にしてないというか、きちんとコロナ対策をやっている人も数多くいるようです。ただ、他の地域と比較しても、数字としては概ね爆発的な感染は抑えられていたという、そういう印象を持っています。

一つ、目立った事例としては、サウジアラビアのメッカ巡礼が規制さ



れた事実が挙げられます。サウジアラビアにはイスラム教

の聖地のメッカという町があります。政府は毎年、巡礼を恒例の行事としているわけですが、これを成功させるすけれど、これを成功させることを非常に重要視していて、サウジアラビアの行政機関として、巡礼省というのがあるぐらいですね。これを毎年、滞りなく安全に成功させるというのに国家の威信をかけて取り組んでいる部分があります。ただ、この巡礼は毎年二百数十万人から、多い年だと三百万人ぐらいの人がメッカという町に押し寄せることになりましたので、今年はそれは無理だということ、半ば中止して千名に限定して、実施されたんですね。千名に限定されましたので、本来行けるはずだった二百数十万人から三百万人、あるいは、その翌年に行くはずだった人も含めれば、世界中の数百万人のイスラム圏の人の人生設計に多少の影響のある、

これは出来事だったと思います。

じつはこの巡礼は一カ所に人が集まりやすいので、世界中から、言い方は悪いんですけど、ありとあらゆるウイルスが同じ場所に、同じ日に集まってくるので、流行性の病気が広まりやすい条件が整っています。じつは私も二〇〇六年の巡礼の時期にサウジアラビアに行ったことがあるのですが、見事インフルエンザらしき感染症に感染してしまい、そこでもかなり苦しい滞在をしたことがあるんです。もともとコロナがなくてもそういった流行性の病気が広まる条件がそろっているんです。今回はサウジアラビア政府が英断を行ったと思います。

今泉 私の研究対象であるホスピタリティの問題を取り上げようと思います。接客やサービスという観点からは、ソーシャルディスタンスで人と人の距離感の基準が大きく変わってしまったということが一番気になっています。人にはパーソナルエリアという、自分を中心にして半径一メートルぐらいのエリアがあります。この中に人がいることによって、安心や親しみを感じて心が動いていくのです。つまり、距離感ということが、対面の時にはとても大切になってきます。これまではその人のパーソナルエリアに入っていくことが「丁寧」「いいことだ」という一つの基準としてありましたが、ソーシャルディスタンスで二メートル離れることが必要になることで、根本の基準が変わってきてしまっているのだというのを感じました。人に近づけないことで、何か心が満たされないものがある、現在オンライン授業を行っていても感じるのですが、そのような歪みがサービス業界のみならず、人の心の動きとして今後何の影響が出てくるであろうと怖いと感じています。

亀山 ありがとうございます。このホスピタリティの問題は、コロナの問題と根本的に関わっていますので、改めて論じたいと思います。地域的な専門でもいいですし、あるいはディシプリンとして持っている専門

性でも構いませんので、「パンデミックと芸術」「パンデミックと政治」といった観点から、それぞれ自由にお話をしていただきたいと思ひます。最初に、室先生から。

室 先ほどのつづきになりますが、私がこれまで長く読んできた物語の中では、物語が語る力であったり、物語が持つ力つていうものにとても意味を込めて書く作品というのが多いんですね。物語がなければ何も無いのと同じだ、物語を持つていうことは、病や死にさえ打ち勝つようなものであつて、単なる娯楽ではないつていうような、そういう詩から始まる作品もあつたりします。

こういうコロナ禍の状況で、特に緊急事態宣言なんかが出された時に、本当に外との関係がかなり限定される。特に一人でこもつたりするとき、何か自分を支えてくれるものや、何か自分を楽しませるものを持つていることが、とても大事なことだな、力になるのだな、ということ改めて実感しました。それはこのコロナ禍にかぎらず、例えば病気になるとか、歳をとるとか、あるいは災害に直面するとか、いろんな状況が人生の中に生じるとは思ひますが、たんに受け入れるだけでなく、逆に発信者としても何か自分が発することで自分の気持ちを昇華できる力が大切だと思ひます。

亀山 ありがとうございます。話が少しずれるんですが、今の室先生のお話を聞きながら気づいたことがあります。じつは、このコロナ禍のなかで、出版界が好業績を上げていらしんですね。今まで活字離れというところが声高に叫ばれてきたのが、ここに来て、コロナのおかげといつては何ですが、活字に対する関心が再び蘇りつつある傾向が見られるつていうことを、最近ちよつと耳にしました。内省の時期が始まりつつある、ということなんでしょうか。いずれにせよ、孤独の上手な過ごし方が求められていることは確かだと思ひます。では、石田先生。

石田 イタリアは古来、交易の中心地だったことから感染症も入つてきやすい状況にあり、感染症をテーマとした芸術作品は豊富にあります。その中でも特に今回のコロナ禍で話題となった文学作品が二つあります。一つはジョヴァンニ・ボッカッチョの『デカメロン』、もう一つがアレクサンドロ・マンゾーニの『いいなづけ』です。

まず、『デカメロン』ですが、これはペスト禍を背景に書かれた作品です。簡単に説明すると、十四世紀のフィレンツェで、町で蔓延するペストを避けて若者たちが郊外の館に閉じこもつて退屈しのぎに語り合つた物語を集めたという設定の散文作品です。作者のボッカッチョは、実際のペスト禍を受けてこの作品を書きました。今まさに室先生がおつしゃつたように、ペストの恐怖を逃れて物語を語り合うという、物語に慰めを見出すという設定になつていゝんですね。ペストの不安を紛らわせるために語られたという設定なので、愉快で、現実を忘れさせるような物語が多くて、今読んでもとても楽しい作品集になつています。興味深いのは、実際のペスト禍を受けて書かれたということで、当時のペストに対する人々の対応とか、そういうつた様子も描かれていゝことです。それも読みどころとなつていゝ作品です。

もう一つの『いいなづけ』なんですけれども、これは十九世紀に書かれた小説なんです。舞台となつていゝのは十七世紀のロンバルディア地方です。この小説のいくつかの章で、十七世紀のイタリアで蔓延した、やはりこれもペストの様子が実際の史実を交えながら描かれていゝます。そこでは例えば外国人やよそ者を危険視する風潮であつたり、不安のあまり感染者を執拗に攻撃する人々や、根も葉もないフェイクニュースに惑わされる人々の様子が描かれていゝ、現代と変わることがないといゝことで、大きな話題になりました。

一期の文学の授業でこの二つの作品を取り上げて、危機の時代に文学がもつ意義とはどのようなものかということに学生と一緒に考えました。

危機の時代には、一回立ち止まって、足元を確認するような、そのような必要に迫られるのではないかと思います。その際、優れた芸術作品というのは、人間の本質をやはりよく捉えているわけですね。ということ、優れた文学というのは、わたしたちが立ち止まって軌道修正する際に一つの指針を提供してくれるのではないかと、ということを考えました。

松山 私がこのコロナ禍で読んだ小説の中に『関東大震災』という題名の吉村昭の小説がありました。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、吉村昭は、優れた記録小説を書いたことで知られる小説家です。この本も文字通り関東大震災を記録したルポルタージュになっています。それで関東大震災ですので、当然、朝鮮人虐殺の描写が出てくるんですね。非常に克明に、事実かどうかは私は判断しかねる部分もあるんですけど、本人によれば取材に基づいて、事実に基づいて書かれていて、非常に衝撃的な話も多くさん書かれています。この話を読んでいるうちに、その様子がどこかコロナ禍の現代の日本の混乱と多少重なって、私の中では読めたという経験がありました。

つまり、コロナ禍の日本で発生した、「自粛警察」「マスク警察」であるとか、あるいは、県外の感染者が多い地方の人間に対する暴力、ネット上での中国人に対する差別的な言動、コロナ禍と関連してそういった言動が盛んになされましたが、そういったものと、この小説の中に出てくる朝鮮人虐殺を主導した当時の自警団の姿と重なる部分があります。現代においても、地震であるとか、パンデミックといった例外状態に陥った時に、日本社会の中から差別であるとか、暴力が噴出してくる可能性は、まだまだ十分にあると思うんですね。今回のコロナ禍の中でもそういった兆候が見られたわけですね。

この小説では朝鮮人虐殺の例が取り上げられています。近代以降の日本でそういった大衆の中から発生してくる暴力であるとか差別といった問題が、おそらく最も先鋭的なかたちで現れたのが、この関東大震災

の中の朝鮮人虐殺であったと思うんですね。ですので、このパンデミックの中で、日本で起きる可能性がある差別・暴力の問題を考える時に、この作品が一つの出発点にしてもよい作品の一つだと感じたということがあります。

亀山 ありがとうございます。今回、関東大震災の問題は、私も非常に関心を持ちました。というのは、この一年ほど加賀乙彦という作家に関心を持って、彼のすべての小説を読み上げたのですが、そのなかでもとくに『永遠の都』には、関東大震災の凄惨なドキュメンタートがつづられるわけですね。

そしてもう一つは、東京大空襲の話です。やはり、このコロナ禍のなかで人々の心を支配しつつあるのが、カタストロフィックイメージです。Zettixのラインナップにも、世界の終わりを扱った映画が、驚くほど豊富に並んでいます。では、今泉先生、お願いします。

今泉 「パンデミックと芸術」、芸術の中でも身近にある音楽についてお話をしたいと思います。

二つの視点からお話をしますと、まず一つ目は個人的に自粛モードになった時に、一番最初に買ったものが、スピーカーなんです。スピーカーを買って、音楽、BGM程度ですけれども、常にかけて、気持ち少し盛り立てたといえますか、結構、音楽に助けられたなと思います。NHKの朝ドラでも、作曲家の古閑裕而さんを主人公にした『エール』をやっていますけれども、やはり音楽は、さまざまな場面で人の心に影響を与えるものだというのを改めて感じた次第です。

二つ目としては、主に学生達も含めた音楽活動のことです。

私は中学、高校時代、吹奏楽部に所属してフルートを演奏していました。やはりその頃の一大イベントというのは、演奏会やコンクールに出場することでした。やはり楽器を演奏することは、飛沫が飛びまじり、

一緒に集まらないと練習ができないため、アマチュアもプロも、練習はもちろん演奏会ができないような状況になったことにとでも心痛めているところです。プロの方は、長いプロ生活の中の一年、二年、こういう時期だと受け止めができるかもしれませんが、学生にとっては限られた学生生活の中での時間ですから、かわいそうですね。一生懸命練習してきたのに、そのコンクールがないとなると、私だったら本当に落ち込みます。芸術とちよつと話がずれるかもしれませんが、音楽に絡めて、とても心が痛む出来事でニュースを見ながら感じた次第です。芸術である音楽は特に、私たちの日常に近い存在であるがゆえ、その偉大さを改めて感じています。

亀山 今、お話を伺いながら連想したことというのは、昨年一月のウィーンフィル日本公演です。ワレリー・ゲルギエフに率いられ、四つぐらの都市で演奏会をしたんですが、私は大阪のフェスティバルホールに見に行きました。その時の記録を、『朝日新聞』に書いたので、ぜひお読みいただければと思います（『朝日新聞』、二〇二〇年十一月十八日、朝刊）。最初、楽員全員がマスク姿で登場してきました。もう本当にびっくりして。そのままマスク姿で演奏するのかなと思ったら、全員がマスクを外して演奏しました。聞くところによると、ウィーンフィルが最も大きな注意を払ったのがフルートなんだそうです。フルートの配置をどこに。一番端っこに置けば、そのフルートの端から漏れる呼吸が誰にも行き渡らない。

もう一つ、今度は差別ということ、イメージしたことは、最初にヨーロッパで最初にこのコロナが話題になったのが、ドイツ、イタリアですが、とくに北イタリアでは、いわゆる「患者の選別」が行われた。「トリアージ」っていうんですか。トリアージっていうのは、本来的に軍事用語なんですね。戦争中に兵士をどうやって分けていって、優先順位をつけて兵士としてまた戦地に送り返すかみたいな。それがそのイタリアの

病院で始まったというニュースを聞いた時に、「あ、これはまさに戦争の状態なんだな」という思いを強くしました。先ほどの関東大震災じゃありませんが、やっぱりものすごい状況がきたのだなという実感をもったのがこのトリアージです。

もう一つ、先ほどの差別の問題と関わってくるのが、アメリカ大統領選だと思っそうですね。

アメリカ大統領選、ざーつとこの二カ月ほど追いかけてきて、やはりアメリカは完全に二極化したという実感を持ちました。でも、負けたトランプを責められない状況っていうのがあると思っんですね。

全体としてこれはやはり一種集団ヒステリーっていうんでしょうか。まさにコロナ禍という非常に異様なムードの中で行われた選挙で、当然のことながら生と死という観念がたがいに水際立ったかたちで意識された。トランプはあえてマスクをしないことで、死を恐れないアメリカ人という一種の不滅性のシンボルたらんとした。そこにアンチグローバルイズムの人たちが心情的に引きつけられていったと思います。このコロナ禍における大統領選というのは、ものすごく何か、これから大きな学問上のテーマとしても残っていくのかなって思いました。

先ほど石田先生が二つの文学作品を挙げてくださったんですが、私もロシア文学の中から、一つ作品を選びたいと思います。ここでは深く触れませんが、アレクサンドル・プーシキンが書いた『ベスト流行下の酒盛り』という短い戯曲です。と同時に、コロナ初期、外出自粛がいわれていた時には、スターリン時代の末期の雰囲気を感じます。浮かべながら、夜の町を散歩していました。

映画では『コンテジョン』が衝撃的でした。この映画を見て、コロナという問題がすごくやはり大きな文学的、あるいは芸術上の問題としてあるんだなっていうことを実感しました。あと、ロシアの場合にはコレラですね。先ほどウィーンフィルの話をしましたけれども、ウィーンフィルが演奏した曲目は、チャイコフスキーの第六交響曲。十九世紀

末のロシアを襲ったコレラ禍の絶頂期に書かれているんですね。しかもチャイコフスキー自身が、その初演の指揮をしてから九日後に同じコレラに感染して死ぬという、いわくつきです。

では、残り時間を用いて、最後に言い残したことをお話いただけると幸いです。コロナ禍での教育のあり方でもいいですし、オンラインと対面の授業の質といった問題でも構いません。では、さっそく室先生からお願いします。

室 教育の話題は、私たちが普段接していることです。大事な問題だとは思いますが、あまりにも多くのことがあり過ぎて、なかなか焦点を絞るのが難しいですね。オンライン、対面、いずれにも、メリット、デメリットがあります。オンラインですと、どこからでもアクセスができるという点で、場合によっては、海外の先生をお招きし、オンラインで講演をいただくこともできるわけです。

学生もオンラインということ、一対一で学生と教員と話をする空間が作ることができたり、あるいは一人ひとりが課題に取り組むということ、完成度が高いという印象を得ました。

一期は課題型とリアルタイムのオンラインを半分づつ併用していましたが、対面ではざざつと一―二行書くぐらいだった学生が、割としっかりとまとまった意見を提出してきたということもあり、その質の高さには驚かされています。オンラインの授業をしていて意外に感じた一面です。

ただ、課題が多いというよりも、受講する授業数がとても多いんですね。学生たちにとって一つ一つの授業の課題は適正なものであったり、本来は九十分の授業プラス三時間の予習といった本来の単位の考え方に立てば、決して多過ぎるということはないでしょうが、ただ学生がとっている授業の数が非常にたくさんあるので、それが重なって、まったく大学に来ることなしに受けるという状況下では、それ自体、非常に困難

なものになっているという実情があります。私たちが対面の授業で行っていた時期には、何気なくこなしていたようなことも見直しという意味では、今回のコロナ禍は、この授業の在り方に関しても根本から見直すきっかけを与えてくれているのかなと感じています。

石田 私の方からも教育ということについて、お話しさせていただきたいと思います。私は主に今リアルタイムで授業を実施しているんですが、その授業をしながら、イタリアでの大学の原点というか、興りに思いを馳せることが多々ありました。というのは、イタリアには一〇八八年に開学したヨーロッパで最古の大学、ボローニヤ大学がありますが、このボローニヤ大学というのはもともとキャンパスも教室もないような状態が始まった、自然発生した大学だったんですね。具体的には学びを求める若者たちがお金を出し合って、教師を雇って、講義をしてもらっていました。講義をもらう場所というのは、広場であったり、教師の自宅であったり、教会であったりさまざま、つまり、キャンパスや教室がない状態で数百年間大学が存続してきたんですね。

現在、一般的に大学というのは、キャンパスがその中心にあって、そこで人々が学んだり教えたりするような「場所」というイメージが非常に強くなると思うんです。でも、歴史を振り返ってみると、大学というのは必ずしも場所に結びついた概念ではなかったんです。少なくともイタリアの大学というのは、長らく知識への情熱が結びつけた人々の集まりのことを指していたんですね。

オンライン授業をしながら、まさに私たちはそのような、似たような状況にあるような気がしていました。室先生もおっしゃっていたように、私もオンライン授業になって、学生からの情熱をこれまで以上に強く感じるようになりました。

もちろん場所、対面の良さもありますので、バランスをとっていく必要はありますが、それでも新しい学びのスタイル、大学のスタイルを今

回のことをきっかけに作っていったらいいなと思います。私自身も試行錯誤しながら考えていきたいと思っていますところですよ。

松山 私からも大学の教育のあり方ということでお話しさせていただきまます。アフターコロナの課題の一つとして、今現在、対面授業とオンライン教育の双方を利用した教育の推進という課題がおそらく国レベルで挙げられてると思いますけれど、この課題に取り組むためには、一つには大学への帰属の仕方、大学に対して学生がどういったかたちで今後帰属していくのかという問題をひとつ考えてもいいのではないかなと思います。

どういふことかといいますと、一般的には、日本の生徒、学生は単一の学校に、あるいは大学に全人的に帰属するというか、一〇〇%その単一の学校なりに帰属して、朝から晩までそこで学校生活を送るというのが基本のスタイルになっていると思うんですね。大学生の場合はある程度アルバイトなどするわけですけど、基本的には勉強はその大学で行って、サークル活動であるとか、文化的な活動も同じ大学で行って、交友関係も基本的にはその大学を通して人と交友するという人が多いと思います。特に最近では、大学が、大学生にそういったいろんなサーブスをお膳立てする、友だちを作る場を作る、交友する場を作るということになっていると思うんですね。

そういった状況の中で、こういったコロナが発生して、自分が帰属している大学に通えない状態になってしまうと、友人を作る機会もないし、スポーツもできない、文化的な活動もできない、何もできない。そういった問題が今、挙がっていると思うんです。実際にはそういった可能性は、もちろんん大学の中にもあるわけですが、同時に大学の外に大きく開かれているのではないかと思います。

それで今後ですけど、仮にオンラインの教育を推進するということになるのであれば、単一の大学に全人的に帰属するのではなくて、例え

ばですが、同時に複数の大学で教育を受けるという可能性も開けて来るように感じます。特にかねてより文科省は生涯学習を推進していますから、一〇〇%全人的なかたちで単独の大学に入るといふかたちとは別のかたちで大学を利用していくシステムを、オンラインを活用することで考えていけるのではないかなと少し感じた次第です。

亀山 帰属の問題というのは、今回のコロナ禍で浮上してきたひじょうに重要な問題だと私も思います。ネットワークという言葉を使うと、少し軽くなってしまっていますが、新しい枠組みを構築していく必要があるなと思います。

特にクラブ活動、課外活動は、本当にリアルに密着した空間を要求するので、知識の受け渡しはオンラインでもできるけれど、リアルでなければできない何かを大学は供給する義務があると考えます。その場合に新しい枠組みを構築する必要があるかもしれないということです。今泉先生、いかがですか。

今泉 私は政治というよりは、発信されている情報の中に絡めて、学生たちに伝えたいことを少しお話ししようと思います。日々ニュースを見ていると、「今日はこの人数だけ感染しました」で、「こうです」と出されることで、やはり学生たちもその情報にすごく影響されて非常に怖がっているんですね。リアルタイムの授業を通して、コミュニケーションを図っていると、そのような実態がわかってきます。ニュースで見ますと、感染者と出しているのは、PCR検査の陽性者のことであって、症状が出ている人はどれだけののか、その中でもとくに重症者はどの程度か、軽症者はどれかとか、やはりそういうこともすべて含めて、全体として感染者というように数字が出ているところ、に正直疑問を感じています。

そのように私は感じていますよということも、授業でも話をするよう

にしているんです。例えば学生の中には、新型コロナウイルスは世界で一番恐ろしいものだ、やはり日々報道を見ていると思ってしまうことでもあります。実際には、それ以上に毎年かなりの方がインフルエンザで亡くなられているわけです。情報を鵜呑みにするのではなくて、ゲシュタルト、多面的に物事を見て、正しく怖がるということがやはり大事なのではないかと思います。

そのような情報は常に疑問をもって自分から調べていくことよって分かってくることもあります。実際にYouTubeなどで、情報を発信されている方もいらっしゃいますからね。いろいろお話しましたが、こういう時こそ、世の中で起きていることに対する見方を、こうしてオンラインで授業ができています今だからこそ、しっかりと学生たちに伝えて、アフターコロナに備えてほしいと感じています。

エアラインのことについても、今までは学生たちは自分の思い入れといますか、夢に基づいていろいろ見ていたと思うのですが、今こそエアラインの現実、こういうことがあると、このように影響を受けるのだということ知り、単に憧れだけではなくて、違う面からも見る目を養う貴重なタイミングだと感じます。

亀山 先生方、大変示唆的なご意見ありがとうございました。最後にひと言、総括のようなことを述べたいと思います。つい最近、『ホモ・デウス』の著者で知られるユヴァル・ノア・ハラリさんが出演している番組を見て、世代間戦争ということを考えました。

ともかくにも、コロナに耐性のない私たち老年世代はまったく通用しなくなっただけという印象を持っているのですが、ハラリさんがその点を衝いている。たんにコロナに対する耐性だけではなく、根本的な側面から、一種、巨大な世代交代が起こっているということを指摘しているのですね。老人の世代は、当然のことながら、死に対する恐怖と常時向かいあっている。何といっても肉体面での耐性があまりない。したがっ

て、いわゆる「リアルな」世界には出ていきにくいという決定的な弱みを持たされるにいたったわけですが、物理的にです。今後、世界を動かしていくのは、ウイルスに感染したにせよ、それに拮抗しうる生命力と体力を持った人間といった、一種の優生学的倫理が支配し始めるかもしれないという懸念を抱きます。

とすると、老年世代は、まさにオンラインの技術に徹底習熟することよってしか活路はなくなる、そんな極端な結論も出てきそうです。今後、世界経済は急速に回復していくでしょうが、その主役は、オンラインか、対面か、という場合、アメリカ大統領選と同じぐらいのきわどいに票差になりそうです。

ちなみに、今回のアメリカ大統領選では、政治の主役がほとんどほとんど高齢化していくような状況があります。トランプ氏が、あえて氏と呼びますが、敢えてマスクをせずに選挙運動したという行動形式には、何かとても象徴的なものが示されていますね。あまり悲観的なまとめで終わりにたくないのですが、やはり世代間戦争とはいわぬまでも、生命の世代と死の世代というこの二つに大きく分かれていくのかもしれないという漠たる疑問を抱いています。ワクチンがすべてを解決してくれるかどうか分かりませんが、ウイルスの変異株の登場という新しい事態もあるので、決して楽観はできません。ともあれ、コロナ終焉までは、私たちはおそらくは対面でなくてオンラインのかたちでさまざまな情報を発信していく必要があるんだということを日々考えております。他方、対面のもっている「リアル」の意味について、とことん追究していく必要がありそうです。

一同 ありがとうございます。